新體

國語教本

文部省檢定濟

藤岡作太郎編

四

4a
810
明41

42064

教科書文庫

4
810
41-1908
20000
66903

資料室

4a
810
明41

文部省檢定濟
明治四十一年二月廿六日　中學校國語科用

文學博士　藤岡作太郎編

新體國語教本

東京　開成館出版

廣島大學
教
66903
圖書

新體國語教本　卷四目次

目次

一　松平信綱の幼時　一
二　母　五
三　松下禪尼　七
四　富士川くだり　八
五　吉田了以　一三
六　水のゆくへ　一六
七　地震　二〇
八　三樂　二五

九　鋼鐵王　二七
一〇　口腹耳目の箴　三四
一一　詔諛　三七
一二　加藤清正　四一
一三　良雄の僕　四六
一四　里浦の自營　五二
一五　伊能忠敬　その一　五七
一六　伊能忠敬　その二　六一
一七　東京　六六
一八　東京の春　七一

一九　春の歌　七五
二〇　鶯宿梅　七六
二一　植物　七九
二二　印度洋より　八三
二三　忘れられぬ人　八七
二四　旅順口の閉塞　九〇
二五　閉塞隊の兵士　九六
二六　下瀨火藥　九九
二七　電氣　一〇五
二八　マルコニー　一一〇

二九　洋學の由來　二六

新體國語教本　卷四

文學博士　藤岡作太郎　編

一　松平信綱の幼時

若君は德川家光、幼名竹千代、大殿は秀忠

長四郎は松平信綱

ある時、若君、大殿の御寢殿の屋の軒端に雀の巢くひ、子生みたりしを、こなたより御覽じて欲しがり給ひ、長四郎とりて參らせよとあり。長四郎十一歳の時なれば、いかにも叶ふまじと辭しければ、「晝は驚きて飛び去ることあるべし。巢くひし處よく見置きて、日暮あるべし。

取るべし。すべし。

れて此方の屋の軒に梯子かけて登り、彼處に忍び行きて取るべし。大人は身重く、足音もすべし、たゞ汝取りてまゐらせよ」と、侍ふ人々の教へしかば、力なく、日暮れぬれば、こなたの屋よりつたひ〳〵行きて、已に御寢殿の軒に至りて、取らんとせしに、踏み損じて、御坪の内へどうと墜つ。

將軍家
御臺所

將軍家御刀取つて障子引きあけ給へば、御臺所燈火とつて出で給ひ、御覽ずるに、長四郎なりけり。將軍家不思議に思召して、「汝は何しにこゝには來りぬるぞ。」と御尋ありしに、「今日の書、この御殿の屋の軒端に、雀

不敵
申さざらん程

の兒うみたるを遙に見て、あまりの欲しさに參りて候ふ。」と申す。將軍家「いや〳〵、おのれが心にはあらじ、誰か教へけるぞ。」と色々に御尋あれども、幾度も初め申しし言葉にかはらず。「おのれ、事の由ありの儘に申さで、爭ひぬるこそ、歳にも似ず不敵なれ。」と仰せられて、大きなる袋の中におしいれて、口を御手づから封じて、柱にかけ給ひ、「ありの儘に申さざらん程は、いつまでもかくて候へ。」と仰せけれども、尙爭ひ申すこと初の如し。夜既に明けて、常の御座に着き給ふ。

御臺所はとく心得たまひ、彼が幼き心に、身の悲しさ

を顧みず、竹千代君の仰なりと申さざる事を、深く感じ給ひて、御手づから袋の縫目を解き、女房達に朝飯取りよせさせ、これたべよとて賜ひて、また御手づから元の如くに縫ひ置き給ふ。晝の程、將軍家入り給ひ、また御推問ありしかど、終に言葉をかへず。御臺所御わび言ありしかば、さらば向後を慎むべしとて、御ゆるしあり。將軍家御臺所に對ひ、「彼が今の心にて生ひ立ちたらんには、竹千代殿の爲には、雙なき忠臣にて候はんものぞ。」とことの外悅びたまひけり。

（新井白石）

向後

生ひ立ちたらんには

ことの外

二　母

何人も、病の床に打臥す時は、日頃雄々しき心も失せて、涙もろく、小兒のやうになるものなり。されば老いたる身にても、病と憂とに苦しめる時、または他鄉にありて、いたはる者も慰むる者もなく、只一人淋しく病床に呻吟せる時、誰か幼時吾を看護り、わが枕を直し、吾を愛撫し給ひし慈母の事をば思ひ起さざるべき。

まことや、わが子に對する母親の慈愛は喩ふるに物

慰むる者（慰むもの）

まことや

なし。利己心もこれを沮むこと能はず、危難もこれを挫くこと能はず、その子が愚なりとて薄らぐこともなく、不孝なりとて弛むこともなし。子の便宜の爲には、いかなる慰みをも棄て、子の幸福の爲には、いかなる樂をも擲ちて、惜しとせず。子にして名を得んか、自ら誇り、子にして財を得んか、自ら喜ぶ。不幸が子の身に襲ひかゝる時、母の愛はその不幸の爲に益〻加り、恥辱が子の名を汚す時、その恥辱を外にして、母は愈〻これをいとほしむ。もし又世界がわが子を容れざることあらんか、母は嬉しきにも悲しきにも、一にも二にも、その侶なるべし。

弛むこと（弛むること）
慰み（慰め）
得んか

（淺野和三郎譯スケッチブック）

三　松下禪尼

北條相模守時頼

相模守時頼の母は松下禪尼といひけり。守を招く事ありけるに、煤けたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀にてきりまはしつゝはられければ、その兄城介義景、その日の設して候ひけるが、「賜はりて、なにがし男にはらせ候はん、さやうの事に心得たる者に候ふ。」と申す。されど「その男も尼が細工によもまさり侍らじ。」とて、なほ一間づゝはられければ、義景重

はられ
はらせ
よも
侍（待）

苦。

若。

七間ばかり

ねて、「皆はりかへんは、遙にたやすく候ふべし。まだらなるも見苦しく候はん。」と申す。尼答へて、「申さるゝこと理ながら、物はやぶれたる所ばかりを修理して、用ふる事ぞと、若き人に見習はせて、心づけんためなり。」といはれけり。

（徒然草による）

四　富士川くだり

朝早く起き、提燈さげし宿の小婢に案内せられて、川舟に下り候。舟は薄き板にて作り、幅一間、丈七間ばかり、胴の間の底板の上に數本の竹を横たへて、その上に薄縁を敷き、上に金巾の屋根を張り、提燈を吊りたり。舟子四人、一人は棹をもつて舳に、一人は舵をとつて艫に、二人は檝をとつて中部に立ち候。

吊（釣）

船板弓の如く撓み

殘月空にあり。川霧深くこめたれば、水の音を聞けども河身を見ず、唯時々川波の月影にきらめきて白蛇の如くなるを見るのみ。岸に焚火する人影は影法師より幽かに候。

五時を合圖に舟は岸を離れ、勾配つきたる川の面を矢の如く走り出し候。瀬を越す毎に、底の船板弓の如く撓み、身延詣の老婆など突つ伏して南無妙法蓮華

只管

身を弓の如く撓ませ

經を唱へ候。併し海を知る小生は恐ろしくも思はず、舷を敲いて、急げ〳〵と叫び候。やがて前の船にちらちらと見えし提燈の火も消えて、夜明け、霧もとぎれて、兩岸の山と河身と、共に露れ候。右岸には駿河街道の電柱見ゆ。峽過ぎて磧、瀬より岩、早川の合流點を過ぎてより舟行いよ〳〵疾くなり候。

時間船なれば、鰍澤、岩淵の半途、南部に身延詣の客を上げし外、只管直行致し候。上り舟の舟子小き藁靴はき、水に入り、磧を踏み、身を弓の如く撓ませて、空舟を曳き上る。見るもいたはしきさへあるに、下りに慣れて舟行も猶遲きが如く、川風の寒きにふるひ、足のしびれにひそみ、奇景も何も眼に入らず、あくびばかり致し候。

あくびばかり

間を縫ひて

下る程に、行く程に

富士川

舟は亂山の間を縫ひて、甲より駿に入り、始めて富士を左に仰ぎ候。それより某製紙會社の建物を左岸に見つゝ、下る程に、行く程に、山開けて川廣く、富

士川鐵橋を透して白帆碧海を望めば、眉もまた舒びつ。岩淵につきて時計を見れば十一時なり、鰍澤より十八里、六時間にて下り候。

午餐

こゝにて午餐を終へ、汽車に乗りて、午後七時、百目柿、葡萄の籠をどさりと逗子の家の縁側におろし候。

（徳富蘆花）

五　吉田了以

初、始

吉田了以は初め與七と稱し、その家代々嵯峨の角倉に住めるを以て、又氏を角倉ともいへり。性工役を好み、嘗て美作に往きて、和計川の艅船を見ておもへらく、百川皆舟を通ずべしと。乃ち慶長十年、幕府に請うて保津川を開鑿す。この川巖高く、水激し、古來纔に筏を流せるのみなりしが、こゝに至りて始めて舟を通じ、二州の民永くその利に賴れり。

慶長十年は二二六五年、德川秀忠の時

開鑿

始、初

二州は丹波と山城と

同十二年、幕命を奉じて富士川を浚へ、駿河の岩淵より舟を曳いて甲州に入る。峽中の民未だ曾て舟を見ず、驚いて曰く、「魚にあらずして水を走る、怪しい哉」と。

曳いて

怪しい哉

この川の險は保津に過ぎたりしに、かくして漕運の途開け、沿岸の民大いに悅べり。翌年、又命を受けて天龍川の開鑿を試みしかども、水勢の烈しきが爲に、功

大いに

全うせず

請うて

下落

かうむ（被）れ

を全うせずして止めり。

京阪の運輸は、大阪、伏見の間には、淀川に舟行の便あり、それより京都までは、賀茂川の流あれども、水淺く、石あらはにして、舟を行り難し。慶長十六年、了以官に請うて、賀茂川に沿うて運河を開く、高瀬川これなり。京都の物價これが爲に下落し、町民今なほその遺澤を被れり。同十九年、富士川

吉田了以

松尾芭蕉は今より二百二三十年前の俳人

繼いで

塞がりて舟通ぜず、幕府了以を召して工事を督せしめんとせしかど、病みて行くこと能はず、その子與市代りて役に從ひ、久しからずして任務を果せり。

與市は素庵と號し、父の業を繼いで、水利漕運の術に長じたり。父子共に學問に志し、家藏の書多く、素庵は古書を刊行せしこと少からず、これを嵯峨本と稱し、大いに後人を益す。

了以は慶長十九年、六十一歳にして歿しぬ。その年、死に先だちて、嵐山に大悲閣を建て、遺言して己の像を置かしむ。芭蕉が

花の山、二町のぼれば大悲閣。

といへるは此處にして、閣上より眺望すれば、保津川を往きかふ舟は眼下にあり、洛中洛外の風景もまた一眸の中に入る。

洛中洛外
一眸の中

六　水のゆくへ

山に登る旅人が頂近き坂路に惱みて、渴く喉を濕さんと、兩手にて徐かに掬うてすら、底をすりて、暫しは後の濁るばかりなる細き流の、淋しげに麓をさして下る。巖をしぼる苔清水、杉の林におちつもる枯葉朽

かわ（濁）く
すら（さへ）

葉の下より滴りいづる水の、彼方此方より流れ入りては、やうく嵩をまして、今は旅人が脫ぎすてし草鞋にもせきとめられず、一團につどひよる落椿をも載せて走るほどになりぬ。或時は羊齒の葉がくれに影を潛めて、音のみさやかに響き、或時は山鳥の鏡と顯れて、艶なる羽色をうつし、曲りに曲り、下りに下りて、谷底におつれば、瀨々の石に白泡たて、岸の岩根に碧の淵を湛ふ。石たゝきわたる鶺鴒、岩魚とる翁を顧みがちにゆくうちに、やがて谷間は末廣に開け、草青く、家居まばらなる廣野に出づ。

みづ（水）
わらぢ（草鞋）
曲りに曲り、下りに下りしらあわ（白泡）

ゆふべ（夕）

いくばく
そこばく

岸には草美しく生ひて、春秋の花、赤に、黄に、紫に影をひたし、螢とびかふ夏の夕、雁なき渡る冬の朝、時々の眺つきせず。朝日影斜に照らしては、腹かへす小鮎水底にきらめき、晝餉時の物靜けきには、山吹散りかゝる水車の音ものどけく、雨を呼ぶ蛙の聲に、長き日の暮れそめては、二つ三つ五つ六つ、星の影次第に水の面に數まさりゆく。

幾度か菜の花畑の傍を過ぎ、榛の木林の中を出で、桃咲く村いくばく、柳しだるゝ橋そこばく通りすぎぬれば、右より左より落ち合ふ里川の流をあつめて、水

きのふ（昨日）

同日の論

さながら

わづらふ

幅ますく廣くなりぬ。市にいづる舟一つ二つ、行く春の落花と共に送り去るほどに、いつしか人煙繁く、市聲喧しき都會の直中を悠然として濶歩し、數多の船舶を自在に胸にのせて海に運ぶ。市中に入りたる後は、水の色も谷川の昨日に似ず、稍濁をうけたるやうなれど、大きさと深さとは、固より同日の論にあらず。かくて洋々として涯なき大洋に入りぬれば、巨艦大舶もさながら落椿の散りうかべる如くにて、旅人が登りわづらふ高山大岳も、皆その腹に收むべきなり。

七　地震

古語に地震をナヰ、地震ふことをナヰフルと云ひますが、佐渡、越後、信濃、沖繩等では、今も尙ナヰと稱してをるさうです。昔から恐ろしい物の譬に、地震、雷、火事、親爺といひますが、雷などは地震とは比較になりませぬ。地震だけで既に惡いものですのに、その上、地震の後には、往々火事や津浪が起つて、非常の慘狀を呈することがあります。

地震は何であるかと云ふに、安政頃の書物には、鯰の

をる。
比較
なまづ。（鯰）

繪が書いてあります。この鯰は日本國土の下に潛伏する大きな動物で、それが體を動かす毎に、震動を起すのですが、鹿島明神が要石を以てこれを押さへ給ふ故に、鹿島には地震がないと申します。鹿島神宮の祭神は建御雷命（たけみかづちのみこと）ですが、この神は、神代の時、高天原から征討大將軍として豐葦原に差向けられ、大國主命に領土を讓らせ、諸々の暴ぶる神を討ち平げ、國土を定められた大功があるから、要石を以て土地を押さへ鎭め給ふとの言ひつたへも生じたのかと思はれます。

る。（繪）
大きな。（大いなる。）
鹿島は常陸國にあり
差向けられ。
思はれ。

色々な。（色々なる。）
ねます

巨大な。（巨大なる。）

日本では鯰ですが、他の國では色々な動物となつてゐます。印度では、地球は牛の角の上に在るから、蠅がこの牛にとまり、牛が體を動かす毎に、大地が震動するのであるといひます。日本でも臺南では、やはり地下に牛が居て動くから、地震が起るので、その證據には、夜間地震があつて、翌朝戸を開けると、牛の毛が地上に殘つて居ると、土人がいふのであります。又西藏では、種々の魔神、怪物があつて、その一種は巨大な動物で、體の高さは一里もあるが、口は極めて小いから、僅の食物でも呑み込むことができぬので、飢に堪へ

傳播
乃至

明治二十四年濃尾地震の時の清洲町の震害

ず、もがき苦しみ、その爲に地震を起すのであると、傳へてゐます。

然らば地震はまことは如何なるものであるかと云ふに、地下の原動點より發して四方に傳播する地殼の波動であつて、數十秒乃至數時間繼續します。即ち地殼中に

弱點

結局

無理な箇所があれば、時を經るに從うて次第にゆがみを增し、遂には急激な變動を發するのが、地震の原因となります。それで地震が起る每に、地下の弱點を一つ〳〵除き去るので、大地震のあつた後には、その中心附近の場所では、當分再び大地震の起る理由がないのですから、結局最も安全な有樣になつたのです。激しい地震の結果を、一方から見ると、山を崩し、谷を塡め、家を壞し、人を殺して、實に慘いものではあるが、また一方から考へると、地下のゆがみがつもりつもつて、非常に大きくなり、果は如何なる大變をも生じかねぬのを、地震のある爲に防がれるので、つまり地震は地殼の現狀を保つてゆく效果のあるものと、見ることが出來るのです。

（地震學講話）

防がれる。

現狀

會津侯は保科正之

山崎闇齋は儒者、のち轉じて神道を唱へたり、今より二百三十年ほど前の人

八　三樂

會津侯嘗て山崎闇齋に問うて曰く、「先生の樂とする所、その大なるものは何ぞ。」闇齋答へて曰く、「吾に三樂あり、第一、萬物の靈たる人間に生まれたること、第二、書を讀み道を學ぶこと、第三、貧賤に生れたることなり。」侯曰く、「願はくは貧賤に生まれたるを樂とする理

養はれ。
かしづかれ。

指導

由を聞かん。」闇齋曰く、「富貴の家に生まれたる者は、金殿玉樓の中に養はれて、世の艱難を知らず、婦女子にかしづかれて、その柔弱なる性を受け、文もなく、武もなくして、一生を遊惰放逸に費す。貧賤の家に長ずれば、衣食の儉を守り、人事の苦樂を解し、道を聽き、藝を習ひ、德熟し、智進みて、家を治め、世を益す。その優劣固より同日の談に非ず」と。顧ふに社會の發達を指導し、美名を萬世に貽すもの

山崎闇齋

は、古今東西、多くは貧窮の中に身を立てたる人にして、富貴に生まれて大事業を成したる者は甚だ稀なり。蓋し成功の祕訣は、勤勉の氣力と不撓の精神とにあり。而してこの氣力を養ひ、この精神を錬るものは、貧少年をおいて誰かある。貧少年よ、汝の貧を歎く勿れ。

おいて

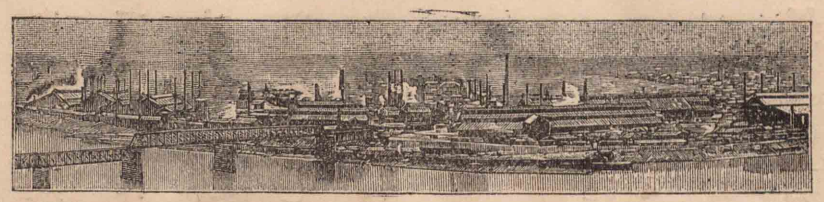
（歐米青年立身傳）

九　鋼鐵王

ピッツバルグは米國ペンシルバニヤ州の都會にして、最良の石炭と鐵材とに富む。ホームステッドはこの都

互、渡

收益



ホームステッドの鐵工場

會を距ること一里餘、大河に沿ひたる所にあり。その地にある鐵工場は、面積わが二十餘町歩に亙り、その使役せる職工の數は、數千人の多きに達すといふ。鐵液は混々として大爐より流れ出で、赤色の鐵塊は機械によりて自在に延長せられ、爆聲轟々として近く雷鳴を聞くに似たり。その資本金は約七億圓にして、一年の收益數千萬圓に上る。この鐵工場は初め有名なるカーネギーの經營に成り、後モルガンこれを他の工場と合はせて、一大トラストを組織するに至れり。

この文は明治卅九年に成れり

統計

雪壤の差

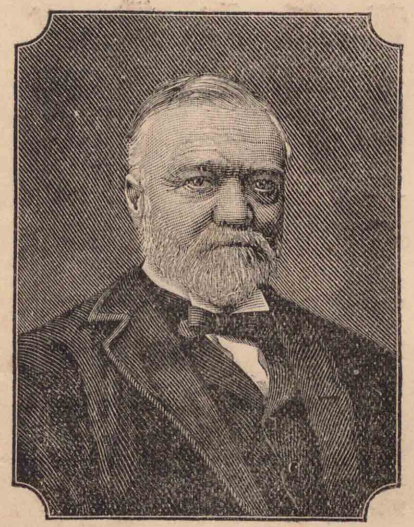
今や。

初め米國鋼鐵の産額は、英國に比して、僅に三分の一に過ぎざりき。然るに最近の統計に據れば、一年一千萬噸以上に達し、わが邦の産額數萬噸に比すれば、殆ど雪壤の差あり。ホームステッドの鐵工場のみにても、予が視察の當時、尚一年に百八十萬噸を製すといへり。

カーネギーは今や七十有餘の高齢に達し、四億圓の財産を有すといふ。若し假に八十歳まで生存すべし

となし、終日終夜寢ぬることなく、一分毎に五磅即ちわが五十圓の金を費すとも、猶死に至るまでには、その資産を盡すこと能はずといふ。然るに彼は子孫の爲に多くの資産を遺すは、却つて之を誤る所以なりとし、かれらに與ふべき遺産を制限せり。又常にいへらく、「偉大の士に鉅億の富をもたしめば、必ず社會の爲に之を活用せん。これ社會の幸福なり」と。

遺（遺）
制限
活用
宣言



カーネギー

カーネギーは自らこの宣言を實行せり。その米國を去るに當りてや、紐育に六十五箇所の圖書館を建築せんが爲に、一千萬圓を寄贈せり。ピッツバルグに於ても、廣大なる圖書館を建て、又世界第一の工業大學を設立せんが爲に、五千萬圓の大金を投じたり。その鄉里なる蘇格蘭に歸るや、亦圖書館及び工業大學の設立に對して、殆ど同額なる寄贈をなし、知名の政治家を評議員として、その設計に從事せり。それ善く富を集め、又善く之を散ずる者は、世に甚だ鮮し、カーネギーの如きは、實にかゝる人物の中の非凡なる者なり。その著「富の福音」を讀む時

當りてや。
歸るや。
知名
設計

理想

は、何人も必ずその理想の大いなることを知るべし。』かくの如く世界第一の富豪となりたるカーネギーは、抑、誰の子にして、何の祕訣を有して、こゝに至りしか。彼は蘇格蘭のある機織の子にして、家固より貧しかりき。幼き時その母よくこれを導き、彼が今日の地位に到れるは、母の功最も大なりきと、傳へらる。母は常に、蘇國の詩聖バーンズが、勤勞を好み、清貧を樂しむことの最も神聖なる由を詠みし歌を敎へて、その兒に大いなる感化を與へたり。

詩聖

神聖

渡、亙

カーネギーはこの慈愛なる母と共に米國に渡りて、汽罐の火夫となり、轉じてピッツバルグの電信局に入りて、脚夫となれり。南北戰役の際、通信事務に就いて功ありて、事務長に擧げらる。後、鐵道會社に入り、鐵橋請負業の有利なるを知りて、會社を辭して之に從事せり。遂に彼は鋼鐵が世界の文明を支配すべきを看破して、この最も有望なる事業に、その一身を委ぬるに至れり。かくして成功の後、往時零落して、母と共に鄕里を出でたる事を追懷し、母子が祖國に負ひたる恩を謝せんが爲に、この始末を敍して一千萬圓をグラスゴー市の圖書館に寄贈せり。その母を思ふ情、故

文明を支配す

零落

祖國

郷を愛する心、兩つながら人を感動せしむ。

（井上友一）

一〇　口腹耳目の箴

必ずしも

あながちに

言ふは易くして、行ふは難く、能く言ふ者必ずしも能く行はず、言多きは品少し、言行は君子の樞機なり、口を守ること瓶の如くせよと、古人も誡めたり。されど思ふこと言はぬは腹ふくるゝ業にして、あながちに沈默を守れとにはあらず。唯口より出づれば世間とて、弦を放れし矢の如く、駟も舌に及ばず、吐いた唾は呑まれぬものなれば、よく〳〵注意して悔を貽さざくい。（悔）

い。（言）ひたい。ゆゑ。

らんために、言ひたいことは明日いへといふなるべし。蛙は口ゆゑに蛇に呑まれ、雉も啼かねば人にうたれず。禍は口より出で、病は口より入る。良藥は口に苦く、甘きものは腹にたまる。腹八合に醫者いらず、フランクリンが十三條の自箴中にも、睡くなるまで食ふなといへり。腹の柔きは無病の徵にして、腹の皮張れば目の皮のたるむものと知るべし。

百聞は一見に如かず、聞きたるのみにては解りにくきことも、一目見てたやすく悟らるゝことあり。されど世にはまた耳を貴んで、目を賤しむといふ諺もあ

なづ。(泥)み

おぢ。

りて、傳へ聞き、習ひ覺えし知識に泥みて、おのが觀察を疎かにする人なきにあらず。かゝる耳學問の輩は、實地に臨みて、盲の牆のぞき、寢耳に水の歎あるべし。されば耳より知識を入るゝと共に、常に目を明かにして、觀察を怠るべからず。目は心の窓なり、窓暗くしては物を見定めがたし。燈臺は下暗く、息の臭きは我知らずとかや。人の一寸は見えて、わが一尺は見えぬ習なれば、身を省みて過を聞くことを喜ばざるべからず。耳を掩うて鈴を窃むは怯なり、盲、蛇におぢざるは勇にあらず。己を知り、人を知るを聰明の士とはい

ふなり。

一一　諂諛

戲曲

シーザーは上古の羅馬の有名なる大將

追從

いかにも

シェークスピーヤの戲曲ジュリアス・シーザーを見るに、シーザー自ら稱して曰く、「甘き言、低き辭儀に凡人ばらは迷ふとも、余が體にはこれらに動かさるゝ血は通はず」と。されど篇中またデシアスがシーザーを評する言に、『君は追從を惡みたまふ。』といへば、『いかにも。』と答へて、實はこの上もなき追從を受けたりとは、氣も着かず。」といへり。これは固より文學者の想像にな

蓋世

大政所は秀吉の母

先妣

れる話なれども、蓋世の英雄も諂諛には惑はさるゝことを、よく寫し得たりといふべし。

安國寺惠瓊、秀吉に仕へて、寵遇を得たり。人皆その姦を知らず。小早川隆景その甥毛利輝元に語つて曰く、「吾嘗て太閤の前に參りしに、惠瓊もまた傍に侍す。談偶〻大政所御逝去の事に及びて、君は流涕數行に及ばれ、惠瓊も共に涙にかきくれたり。君こそ先妣を懷うて悲しくもおはすべけれ、惠瓊が何も大いに歎くべきことなきに、顏を覆うて泣けるは、自ら欺けるなり。太閤その諂諛を察したまはずして、寵愛益〻深し。あはれ君に萬一の事ましまさば、姦僧恐らくは國を誤ることあらん。」といへり。果して惠瓊は後に石田三成に黨して、豐臣氏の滅亡を早くしたりといふ。

殷の湯王、周の武王、共に支那古代の名君

苦笑　便佞

隆景の父毛利元就は戰國の名將なり。儒臣法橋惠齋その德を頌して、「方今君の威名中國に轟き、四民湯武の世に遇ひたりとて、悅服致し居り候ふ。」と申す。元就苦笑して、「湯武の世には、汝が如き便佞の臣なかりき。これを以て直にわが湯武に及ばざることを知るなり。」といへり。これより後、毛利家に諂諛の風大いに減じたりとかや。

他人の善惡を辨ずるは易く、己の是非を判ずるは難し。隆景が秀吉を評せしが如きは、なほ能くするを得べしといへども、元就が佞臣を斥けしは、世に有りがたき心がけなるべし。「巧言令色、鮮いかな、仁。」と古語にもいへり。追從輕薄の厭ふべきは、啻に主從の間のみならず、朋友の間も亦然り。吾等は巧言を進めて、人を惑はすべからず、令色を迎へて、自ら得たりとすべからず。人の非を諫めて憚らず、己の過を聞いて悔い、互に砥勵して德行を進むべし。

論語の言

輕薄

進（勸）

砥勵（ハゲム）

一二　加藤清正

加藤肥後守清正ハ豐臣秀吉ノ功臣ナリ。剛勇ニシテ武略アリ、戰場ノ功名普ク世ニ聞ユ。マタ士ヲ愛シ民ヲ恤ミ、深ク義理ヲ重ンジタリ。征韓ノ役、妙法ノ旗ノ翻ルヲ望ミテハ、「鬼上官來レリ。」トテ、敵軍スベテ恐レヲノヽキシガ、清正ハ軍令ヲ嚴ニシテ掠奪ヲ許サズ、朝鮮ノ二王子ヲ生捕リテモ、厚クコレヲモテナシケレバ、王子モソノ恩ヲ忘レズ、後コレヲ謝シテ、「眞ニ日本中ノ好人ナリ。」ト稱シタリトイフ。

輔佐

秀吉薨ジテ後、ソノ子秀頼年ナホ幼ナリ。輔佐ノ任ニ當リシ前田利家モ、幾ホドモナクシテ薨ジ、德川家康ノ勢ヒトリ盛ンニ、關ヶ原ノ役ノ後ハ、人心益コレニ歸シタリ。清正嘗テ人ニ語リテ曰ク、「利家ハ元來無學ノ人ナリシガ、晩年ニ及ビテ學問ニ志シタリ。ソノ平生ノ談話モ今日ニ至リテ思ヒ當ルコト多シ。中ニモ『論語ニ六尺ノ孤ヲ託スベク、大節ニ臨ミテ奪フベカラザルハ君子人ナリト、イフコトアリ。』ト語リシヲ、ソノ頃ハ何トモ心ヅカズ、ソノ意モ尋ネズシテ過ギタリシニ、近年惺窩先生ニ學ビテ、始メテ悟リヌ。今ノ世ニ

可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節、而不可奪也、君子人歟、君子人也（論語）

惺窩藤原肅

服膺

アリテコノ語ヲ服膺セザルモノハ、恐ラクハ不義ニ陷ラン。アハレ利家存命ナラバ、學問ノ效モアルベキニ。」トイヒテ、歎息シタリ。

慶長十六年春、秀頼上洛シテ、家康ヲ二條城ニ訪ヘリ。清正淺野幸長ト共ニコレヲ鳥羽ニ迎ヘ、草鞋ハキ、青竹ヲ杖ニツキ、幼主ノ乘物ノ兩脇ニ附キソヒテ

慶長十六年は二二七一年

上洛

つゑ。（杖）

加藤清正

視（見）

警護ス。サテ對面モ無事ニ濟ミケレバ、秀頼ハ豐國神社ニ詣デ、大佛建立ノ工事ヲ視テ、大阪ニ歸レリ。傳ヘイフ、清正暇ヲ賜ハリテ、伏見ノ城ニ歸リ、懷ヨリ短刀ヲ出シテ、「今日聊カ亡君ノ御恩ニ報イ參ラセタリ。」トテ拉キヌトゾ。ツイデ任國ニ歸リテ、幾バクモナクシテ卒シヌ。

喧嘩

清正ニ仕ヘシ十二三歳ノ小童二人喧嘩シテ、互ニ傷ヲ負ヘリ。清正特ニ老臣二人ヲ召シテ、法ノ如クセヨト命ズ。老臣相語リテ、「ワレ等ヲ呼ビテイヒツケラルル程ノ大事ニテモアラザルニ。」トツブヤキナガラ、二

イヒツケラルル。

童ヲ誅シタリ。程ヘテ秋ノ月サヤカナル夜、清正舞ヲマハセテ慰ミケルガ、ソノ曲ノ中ニ、源滿仲ノ家來仲光ガ、主ノ子ヲ殺スベシト命ゼラレテ、セン方ナク己ノ子ヲコレニ代ヘ、ヤウ〳〵滿仲ノ怒ヲ宥メシコトアリ。清正コレヲ見テ涙ヲ流シ、「古ノ人ハ思ヒヤリモ深カリケリ。」トイヘルヲ聞キテ、老臣「サテハイツゾヤノ仰ハ、厚キ御情ノ籠リシコトナルヲ、覺ラザリシコソ口惜シケレ。」トテ深ク後悔シケリ。

マハセ。

命ゼラレ。

指揮

清正田地ヲ拓キ、水利ヲ通ジ、特ニ築城ノ術ニ精シク、造築アル毎ニ自ラ鞭ヲ揚ゲテ指揮セリ。ソノ企畫セ

シトコロ、百世易フベカラズ。名古屋城ノ天守ハ、今ナホ巍然トシテソノ遺功ヲ示ス。

一三　良雄の僕

元禄十五年は二三六二年、徳川綱吉の時

足並

元禄十五年十二月十五日、冴えたる月影も薄らぎ、昨日降りたる雪の上より夜は明けぬ。朝風痛き兩國橋を同勢あまた火事裝束に身を固めて、足並勇ましく西へ渡るは、これぞ赤穗の浪士四十餘人が今しも本望を遂げて、高輪泉岳寺に引上ぐるなりける。見驚き聞き驚きて、噂は忽ち江戸中に弘まり、諸國に弘まり

小兵

寛文元年は二三二一年、徳川家綱の時

當時の赤穗侯は淺野長友

心腹を傾け

生ゆる

ぬ。何處の里もその評判のみ喧しく、浪士の平生の事、その一族從僕の事までも、多く世に傳れり。

四十餘人を指揮せる大石良雄は、通稱を内藏助といふ。もと千五百石の祿を食みて、淺野家の國家老なりき。小兵にして聲低く、詞少く、立居振舞も靜かなり。寛文の頃、山鹿素行罪を幕府に得て、赤穗に預けらる。素行經學と兵法とを以て天下に名あり。一日赤穗侯に對ひて曰く、「日頃の厚遇謝し奉るに辭なし、聊か御恩に報いんが爲に、心腹を傾けて諸士を教へたり。蒔きたる種は生ゆる時も候ぶべし」と。良雄も之に學び、又

庸器

處理

進退

京に出でては伊藤仁齋の門に入れり。仁齋評して、「この人愚なるが如くなれども、庸器にあらず、必ず大事に堪へん。」といへり。赤穗の封奪はれし時、諸士狼狽して爲すところを知らず。良雄日頃は重用せられず、才ありとも見えざりしが、この時に至りて、少しも周章てたる色なく、事務を處理すること流るゝが如し。諸士始めてその器量に心服して、進退を一任し、その指揮に從うて働くこと手足の如くなりき。

赤穗の城を明け渡して後は、諸士思ひ〳〵に離散せり。良雄も亦國を去つて、洛東山科に移らんとす。嘗て

重ねての

良雄と八介

召使ひし老僕八介といふもの暇乞にとて來り、「わが君今出で立ちたまはば、御目にかゝるもこれが終なるべし。吾かく老い朽ちて、御供に立つ事の叶はぬこそ、殘念なれ。せめては形見の一品にても賜りたし。」といふ。良雄頭を撫で、「今度の騒動にて、吾も途方にくれぬ。重ねての仕官も面倒なれば、都近き田舍の百

姓となりて、安らかに一生を送らんと思ふなり。長々實義に奉公しくれたる禮に、何なりとも與へんと思へども、今の身の上なれば心に任せず、せめては是だけにても收めくれよ。」とて、十何兩かの金を取り出して與へたり。

八介その包を取つて投げ、「穢らはし、わが君。老いぼれたれども、八介金がほしさに參るべきか。日頃丈夫の御心も腐り候ふか、亂れ候ふか。金が大事ならば君こそ御貯あれ。思へば、代々高恩の御城主は恨を呑んで御最期あり、赤穗一面野も山も空しく人手に渡るを

參るべきか
腐り候ふか
恨を呑んで

すら（さへ）
揃ひも揃うて

見ては、吾等如き下部すら胸も湧きかへるに、三百人の侍揃ひも揃うて腰拔侍にて候ふことの悔しや。いつの爲とて御城主は侍を養ひたまひしぞ。赤穗の武士に一人も魂あるものはなきか、口惜しや。」と罵りて、涙をはら〳〵と流せり。

良雄は俯いて物をも言はず、良久しうして曰く、「吾過てり、過てり、眞直なる汝の諫は永く忘れじ。」とて、やがて筆を執つて、主從二人の姿を畫き、「之を見よ、八介。これはわが若かりし頃、江戸にて汝を供につれて、歩きし樣を寫せるなり。昔を思ひ出して、之を形見に參ら

す。」とて與ふれば、八介もやうゝ憤を收め、「御筆の跡こそ賤が伏家の寶なれ。幾何もなき世に、朝夕君と仰ぎてかしづき奉るべし。」とおし戴きて歸れりとぞ。その後元祿十五年の冬まで八介はながらへて、復讐の噂を傳へ聞きしか、いかに。

君と仰ぎ

復讐

一四　里浦の自營

徳島縣里浦村は鳴門の西南に在り、東北遙に淡路に對す。昔允恭天皇淡路に行幸ありし時、明石の海底に光る物あり。村の海人男狹磯獨り進んで海中に入り、

在、有

あり（有）在

眞珠を得て天皇に獻じぬ。されど不幸にしてこれが爲に命を隕ししかば、天皇深く悼み給ひ、勅して、永代、村の公租を免じ給ひぬ。村民謂へらく、君の爲に身を捧ぐるは固より臣子の本分なりと、因りて相謀りて之を辭し奉りぬ。後幾たびも水害を被りしが、決して他の救助を受けず、海草の類を採りて、能く自營の道を立てたり。

隕ししかば

降つて享和二年に至り、時の領主は特に里浦の年貢滯なきことを賞し、嘉永四年、村民は領主の庭前に召されて、復褒詞を賜はりたり。五六年前、この地海嘯の

享和二年は二四六二年、德川家齊の時
嘉永四年は二五一一年、德川家慶の時
本文は明治四十年に成れり

子爵東園基愛

推さるゝや。

難に遭ひしことあり。東園侍從勅を奉じ、往きてその情を視る。その時、村民は祖先以來未だ曾て他の救助を受けざりしことを言ひ、必ず自營して災餘の窮を濟はんと誓ふ。侍從その志に感じて、覺えず涙下りぬとぞ。

今の村長村幸八は男狹磯の後裔なりと傳ふ。その村長に推さるゝや、まづ村の古例を援き、村民を戒めて、將來益、その美風を完うし、永く祖先の名を墜さざらんことを約せしめて、然る後に任に就けり。

協同して萬事を爲すは、古よりこの村の美風なり。一

公共

捕獲。

保護。

繁殖せしめ。

得しめ。

抽籤

二の例を擧ぐれば、蛤講といふものあり。その收益の一部を以て公共の資とす。もと撫養蛤はこの村に特有なる產物なりしが、濫りに之を捕獲せしが爲に、產額年々に減じたり。よりて蛤講は網目、網絲を制限し、捕獲の期日を定めて、蛤の保護に努め、又競賣の法をも定めて、その代金よりまづ諸稅及び村費を納めしむ。之が爲に能く蛤を繁殖せしめ、兼ねて納稅の便を得しめぬ。

又船講といふものあり。講に加れる者は日々若干の貯金をなし、之によりて毎年新式の漁船を造り、抽籤

を以て順次にこれを取る。抑村民は從來纔に地曳網に依りて漁獲をなすに過ぎざりき。加ふるにその地にて俗に大職と稱せらるゝ資産者は、小職といふ無資産者を制して、その事業を妨ぐること甚だしかりき。小職は常に之が爲に困難し、纔に古船を購ひて、勞銀にも足らざる漁獲をなすに過ぎず、大職も亦小成に安んじて、一村の漁業は漸く衰へゆきたり。村長深く之を憂へ、利害を究めて、回復の道を立つ。即ち船講は小職の申合によりて組織せられしものにして、實に村長等の苦心に成れるなり。

に過ぎざりき

小成に安んじ

曾（嘗）

里浦村民が協同の美風凡そかくの如し。租税の如きも、二百年來、曾て滯納者を出したることなしといひ、學校の教師は之を他に誇るべき事として、兒童に語り、兒童は歸りて之をその父兄に告げ、一村相戒め、相勵みて、この風に違はざらんと競へり。（地方自治要鑑）

一五　伊能忠敬　その一

古來、わが國の地理の調査に關して、功績の大いなるものは、伊能忠敬を第一とすべし。忠敬は今より百六十餘年前、下總に生まれ、神保氏の三男なり、十八歳に

邊幅を修せず

貫かずんば

醤油

して出でて伊能氏を嗣げり。人と爲り卒直にして邊幅を修せず、人に對して寛厚なれども、己を守ること嚴正に、精力拔群にして、志すところは貫かずんば止まず。幼き時は圍碁を好みしが、その徒らに時間を費すことを思ひ、有爲の人の手にすべきものにあらずとして、その後は一生棄てて顧みざりきといふ。

忠敬の養家は佐原にあり。この地は醤油、酒類の釀造を以て知られたる處にして、伊能氏も代々この業に從ひ、土地の一富豪なりしが、養父早く歿して、家道頓に衰へぬ。忠敬その後を嗣ぎて、資産の回復を以て己

累年一日の如く

天明七年（一七八七）のこと、徳川家齊の時

たればとて

が任とし、質素勤勉を家法とし、家人に先だちて勞動すること、累年一日の如くなりしかば、その功遂に顯れ、年四十前後の頃は、以前にまされる富裕の身となりぬ。されど貨を積みて獨り樂しむにはあらず、天明の飢饉には、私財を捐てて窮民を救ふこと數回、鄕里より近村までその德に沾へり。

忠敬天性學問を好みしが、壯年の時は世事に忙しくして、これに專らなること能はざりき。今は既に家道の整理も終りたればとて、家をその子に讓りて、鄕里を出でぬ、時に年五十。常人ならんには、隱居して餘生

剛毅

質し。しか。

學。

學問。

を樂しむ頃なるに、更に青年の元氣を以て、志すところの曆學を學び始めたる剛毅の志は、懦夫をも奮ひ起たしむべし。さて江戸に來りて、その道の諸家に就きて疑を質ししかど、未だ心に合ふものなかりしに、會、幕府に改曆の擧ありて、天文學の大家高橋東岡大阪より聘せられしかば、忠敬は直にその門に入りぬ。この時、師の年卅二にして、弟子の既に五十一なることを、をかしきに似たれども、師弟の關係は固より年齡の相違にあらずして、學問の上にあり。これより忠敬は一心不亂に勉强すること數年、遂にその道の奥を

出藍の譽。

慨然として

窮め、測量の術に至りては、出藍の譽を得たり。されど、謙讓にして常に師恩を忘れず、臨終の際、遺言して曰く、「わが成業は先師の賜なり、吾死せば師の墓側に葬るべし」と。かくして二人の墓は淺草源空寺の地内に並び立てり。

一六　伊能忠敬　その二

折しも、ロシヤ人屢蝦夷に來りて、北海の警戒怠るべからず。忠敬慨然として官に請ひて、私費を以て蝦夷を測量す。地圖成りて獻れるに、幕府これを賞して、苗

寛政十二年は二四六〇年、徳川家齊の時

老いて老いざる

字帶刀を許せり。時に寛政十二年にして、忠敬正に五十六歳、老いて老いざる丈夫は、これを事業の手始として、その後益、勉め勵み、幕府もまたその術の精妙なるを認めて、これを擧げ用ひ、天文方に屬して全國の實測に從事せしめたり。

伊能忠敬

つら〳〵忠敬が足跡の到れるところを概觀すれば、北は蝦夷より始め、細かに本州の沿海を測れるは勿論にて、北陸道は佐渡に及び、西南は南海、西海兩道を窮めて、壹岐、對馬に至る。行旅數回、遂に沿海輿地全圖を成し、又ほかに江戸府内の全圖等をも作れり。白髮の老翁が、數人の助手を率ゐて、日にやけ、雨にぬれ、險崖を攀ぢ、風波を凌ぎ、寒さも厭はず、暑さも嫌はず、晝は野に立ち、河に沿ひて、實測に餘念なく、夜は恒星を觀測して、緯度を計算し、もしくは客舍の孤燈の下に製圖し、深更に至りてなほ疲勞を覺えざるは、立志傳中にも稀に見るところなり。當時

概觀

攀（攀）

……に餘念なく

公開

まさらずや。

開闢

の習として、諸藩の大名はその領地を他國の人に公開することを欲せざれば、要害の地にたち入るは甚だ難く、ある時は賣卜者に扮し、傘の中に測量器を隠して往來せしこともあり。堅忍不拔、困難に會へば益奮うて、遂にその望を遂げたるは、赫々たる戰場の功よりもまさらずや。

忠敬が用ひたる測量の器械は、多くは自製に成りて粗末なるものなりしが、その製圖の精密なることは、今日にありても感歎せざるを得ず。開闢以來、正確なる日本全圖は實にこれを始とするなり。幕末の世、イ

毫釐の差も。

地圖もあるか。

地圖も、……

ものも、……

文政元年は二四七八年、德川家齊の時

ギリス人がわが國の沿岸を測量せんことを請ひし時、幕府これを否みて、忠敬の製圖を與ふ。イギリス人試に實地に驗せしに、毫釐の差もなかりしかば、この國にかゝる精密なる地圖もあるかと驚きたりとぞ。されば明治の世となりて、陸海軍に用ふる地圖も、又地理局にて製したるものも、皆これを原圖としたりといふ。

忠敬が實測に從事せしより、凡そ十八年にして志ほぼ達し、なほ進んで爲すことあらんとせしが、病に冒されて果さず。文政元年、七十四歳にして江戸に歿し

表彰

ぬ。明治十六年、特旨によりて正四位を贈られ、後また地學協會の發起にて、芝公園の丸山に劍形の銅標を建てて、その功績を表彰したり。

一七　東京

煙をあぐるばかり

東京の地は、古の武藏野の一角なり。その昔を思へば、萱薄の廣野、潮入の葦原たゞ茫々として、草わけ渡る風の聲も淋しく、彼處に一村、此處に一村、牧童漁翁が煙をあぐるばかりの片田舍なりき。

源平時代には、武藏八平氏の一なる江戸氏こゝに住

當時の關東管領は上杉定正

長祿元年は二一一七年

都會

みて、子孫代々この地を領したり。下つて室町幕府の衰へし頃、關東管領上杉氏の老臣大田道灌、千代田の地を相して城廓を構ふ、卽ち江戸城にして、長祿元年工事成りぬ。城樓に上りて見渡せば、關東の平野は、東に筑波の翠、西に富士の白妙、その外に眼を遮るものもなし。思ふに、封建の要害よりも、文明の都會たるべき處なり。道灌その主に殺されて、城は上杉氏の直轄となりしが、小田原の北條氏が上杉を破るに及びて、その手に歸したり。その後、豐臣秀吉北條を滅し、德川家康にその舊領を賜ひて、江戸城に居らしめたり。

天正十八年は二二五〇年
見るかげもなき
覇權
寛永元年は二二八四年、德川家光の時
列ね（列なり）

天正十八年八月朔日、家康入城す。時に城内いたく荒れ、そぎ葺の屋根は漏り、船板の塀は朽ちて、見るかげもなき樣なるを普請し、又町割を定め、沼を埋め、渠を開き、水道を通じ、橋を架けて、切りに新府を經營す。これより四方の民來り集り、關東の中心は小田原より轉じて江戸に移れり。

關ヶ原の戰を經て、家康が天下の覇權を握りしより、諸大名は請うてこゝにその邸を營み、寛永年間には、また大名の妻子を江戸詰としたれば、市街は著しく擴がり、山の手には武士屋敷門を列ね、下町には町家店

並べ（並び）
天明元年は二四四一年
誇稱も空しからず
率ゐて

を並べて、わけて賑へる所は、土一升金一升の稱あり。風强き土地なれば、大火多けれど、火事は江戸の花ともいひ、一災毎に市區を改正して、繁昌は年々に增加す。川を越え、田を埋め、延びて止る所を知らざれば、時に令を發して市街の膨脹を制限したることもあり。天明頃の計算によりて大體を推せば、當時の人口は二百萬に近かりしが如し。花の大江戸の誇稱も空しからず。

維新の際、幕府は倒れ、旗本は離散し、大名は妻子家臣を率ゐて、藩國に歸りたれば、三百年の覇府も忽ち衰

東京の今昔

銀座

車駕

へ、一時は人家を壞して桑畠とするものさへありき。されどそれも一時のことなり、明治元年詔ありて江戸を東京と改稱し、車駕東下ありしが、一旦京都に還幸あり。されど議更に動き、翌年再び行幸ありて、永く千代田城を皇居と定めたまふ。これより東京はわが邦の帝都となれり。東京に遊ぶもの、二重橋の際に跪

望（臨）

大廈

亡ぶるは

一喜一憂

きて宮城を拜し、一歩南すれば、日比谷公園に入るべし。立ちて四方を望めば、大廈高屋巍然として聳ゆ。それより電車に乘りて、坦々たる大道を走れば、到るところ江戸の舊觀の改れるを見る。東宮御所はもとの紀州藩邸、士官學校は尾州藩邸にて、水戸屋敷は砲兵工廠となり、加賀屋敷は帝國大學と變りぬ。古の跡の亡ぶるは惜しけれど、都府の發達は嬉しからぬにあらず。一喜一憂、低回して古今の變に驚くのみ。

一八　東京の春

杖を曳く

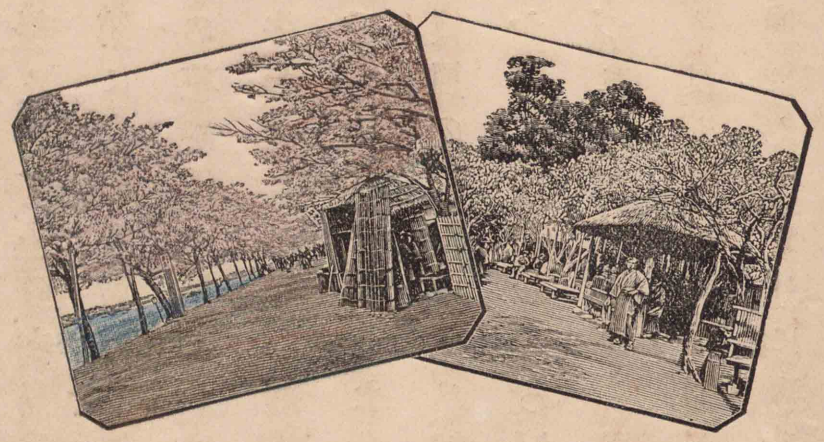
名に背かず

風流

餘寒未だ去らず、風なほ身にしみわたるに、南枝の一二輪早く綻びかゝりて、春の來るを報ずれば、空のけしきは長閑ならざれど、所々の梅園に杖を曳くもの少からず。そのゆく先々は、東に龜戸、小村井、木下川の梅園、向島の百花園、南に大森の八景園、池上、蒲田の梅園等、近郊にありて有名なり。就中、龜戸の臥龍梅は龜戸神社の東北四町許にあり。老幹蜿蜒として、眞に臥龍の名に背かず、その名は德川光圀の命ぜしなりといふ。風流の客も不風流の人も園内に遊びて、名物の梅干に茶を啜れば、春の賑はこの邊より起る心地す。

行樂

龜戸　向島



小村井、木下川の梅園もこゝより遠からざれば、遊客のたち寄り、百花園にさへ廻りて、一日の行樂をなすも少からず。遠くは、汽車の便によりて、水戸の偕樂園に遊ぶもあり。』やがて春雨絲の如く降り、冬の着物のうるさき頃になれば、彼岸櫻ぞ咲きそむる。上野清水堂の邊よろし。これを櫻

の魁として、上野、向島、飛鳥山、やゝ隔りては小金井等、次第に花の音信あり、就中向島最も盛んなり。長堤十里の花は雲と見まがふばかりにて、三圍の鳥居前より牛御前、長命寺の邊までいと盛りに、白髭、梅若の邊までも咲きに咲きたり。側には隅田川洋々として、白帆は風の誘ふに從ひ、都鳥は楫の音に驚きて、いづこにか去りけん。おぼろげなる待乳山の森、淺草寺の塔、いづれか春の眺ならざる。今戸、白髭、橋場の渡船は沈まんばかりに人を積み、名物櫻餅、言問團子の店は、家も崩れんばかりに込みあふ。水上には花見船の三絃

いづこ

いづれか

しづ。（沈）まん

くづ。（崩）れん

太鼓うち鳴らしてさゞめくもあれば、血氣の青年が花を眺の外にして、端艇を漕ぐもあり。これや都人が一年一度の櫻狩、その雜沓は筆にも記しがたし。

（東京風俗志）

眺の外にして

雜沓

一九　春の歌

二見潟こちふく風にあけそめて、
神代のまゝの春はきにけり。　（橘千蔭）

もしほやく難波の浦の八重霞、
一重はあまのしわざなりけり。　（僧契沖）

竹芝や大井、品川おしこめて、

きにけり。

なりけり。

江戸の大門はかすみそめたる。　（井上文雄）

おりたちて朝菜あらへば、賀茂川の
岸の柳にうぐひすのなく。　（太田垣蓮月）

紀貫之

二〇　鶯宿梅

はづかしや

さゝねど人も尋ね來ず、
藁屋わびしくおちぶれて、
歌に名だかき貫之の
娘といふもはづかしや。

金も寶も。

吾を待ち顔

うたひつゝ。

金も寶もなき家に
似あはぬ物といはれても、
これぞわが代の慰めと
軒端をかざる梅の花。

鶯こそは日々の友。
起き出づる吾を待ち顔に、
翼も輕く香をちらし、
朝日の歌をうたひつゝ。

雲の上

里のおとづれいかにして
雲の上まで聞えけん、
紅梅召すと御使の
くだるは花の譽なり。

わかれかな。

されどとゞまるわが身こそ、
心さびしきわかれかな。
せん方なさに歌一首
枝に結びてたてまつる。

いとも。

勅なればいともかしこし、鶯の
宿はと問はばいかゞ答へん。

二一　植物

關係
利用
裨益

植物と吾々との關係は極めて密接である。吾々は十分に植物を利用して、人生に裨益を與へさせて居る。即ち食料、服料、木材、燃料、工業品、染料など種々の物質を植物界から取る。すべて吾々に直接に役に立つ植物を有用植物と云ふのである。

尤も國々の風俗、習慣等の異なるに從つて、有用植物

おのづから（みづから）

の種類もおのづから違ふ。併し麥、米、その他の穀物、豆類、菜類等は、諸國に通じて要用の食物である。木材になる植物は、わが邦では、檜、栗、樫、桐などが良材を供給する。外國には、紫檀、黑檀、その他堅い材質の植物が澤山ある。工業品として用ひられるものの中で、コルクはコルクガシと云ふ樹の皮から取つたものである。

纖維

又種々の植物の纖維から衣服、紙、繩の原料を取る。疊表、蠟、漆の如き工業品なども、皆それ〴〵の植物から取つたのである。

醱酵

バクテリヤのやうな小い植物も、種々の醱酵を起したり、又人體、諸動物などに恐ろしい傳染病を起すことがあるから、吾々とやはり直接又は間接の關係がある。なほ藥用植物などにも大切なものが色々ある。

傳染病

直接　間接

園藝

又美麗な花が咲き、葉が出る園藝植物の類も多い。わが邦では、殊に盆栽といつて、種々の樹木、草花等を小い鉢に植ゑ、色々に形を造つて、それを愛翫するものが澤山ある。園藝植物は、皆それ〴〵の性質を具へて居て。たとへば松に剛直の氣があり、杉は幽邃の風を

剛直　幽邃

優美　清楚

もち、櫻は優美で、梅は清楚であるなど、植物の違ふに從つてその趣も違ふ。そのほか新柳の風に梳り、梧桐

霜に傲る

の雨に鳴り、蓮葉の玉を轉がし、寒菊の霜に傲るなど、四季折々の眺に飽かぬ美麗な植物は、わが邦に最も多い。

すべて森林またはその他の處に生えて居る樹木の種類、形狀などは、その土地の風景をつくる上に必要な材料である。松林、杉林、竹林または柳、櫻、銀杏、楓の樹などが、各、特別の趣を現すのは、誰も知る所である。たとへば日光の杉並木、木曾の檜山、唐崎の松、鎌倉八幡の銀杏、太宰府天神の樟など、いづれもその場所に於て、一種の美觀を示して居る。

誰も知る所

（植物界の話）

穩なるに。

二二　印度洋より

香港より差出し候繪葉書はもはや印度洋に入ることとなり候ひ昨曉新嘉坡を發して今印度洋上を旅行致候が多風の穩なるは幸にして暈船する者一人も無之候の封を切りて一別以來の消息を事細かまづ行ずりの事上海や一口に入れば初秋海の情景はかねてその想像に二倍三倍なるべく存候

信濃丸學校の陸上マストにてだに酒を快哉

（注四）

操縦

減ずるまゝに

を吟び作にまして七日目に餘る事なれ
ども甲板上の暑氣は知識にすりて小兄等自ら操縦
怠し過ぎゆく海も陸もすべて始めて見る事
景色風にふれば其の嬉しさ面白さ迚も筆舌
の推量し得ざる所と被存候
江田島を解纜致ひより途中程々の強暑
に際どりしたるにつしかこの一箇月に近く
お成作の間緯度の減ずるまゝに暑氣は
及比例にかゝりしが天候は概ね順良にて只一
度上海に出でて三四十浬を走りたる時に作

すはこそとて

さしもの

囁くともなく

ひきゝ鬼ち暴風の警報ありすはこそとてすぐ
さまの甲板上の器具なども始末致す中いつまく
天の一方に黒雲起りどうと襲ひ来る風と共に
恐しき大雨大雷お成りさしもの新造たる
本の葉のやうにゆらめきひゝく敵傷艦の運命
もかゝる中にこの邊にて窮りしにやなど想ひ
てなさけなく存じ候次第者の囁くともな
く諸子は自己の軍艦と自己の技術とを
信ずること能はざるかとふ聲聞えこれを
聞くや富士艦に生じ浪濤の如き甲板にか

やうの折張り紙を作りて各〻任務に勵み
一晝夜許にしてこの難關を切りぬけ得たり
時の惜しまれる人々をたゝえがたく存じ候
昨夕はうち續く平和に慣みまれかの雨かの
嵐更に勢を增して殺伐なる攻めよと云ふ聲
る次第にて實に一刻もまた軍歌に作曲の
出でやらんとて小兵衛行きて遥ばるべからぞ
されば筆の前途二義混雜未決
してこれしきの通信に暇かし給
ふなと申添へ置き候

難關

これしきの

二三　忘れられぬ人

西洋にありし間に最も著しく感じたることは、何ぞといへば、偉大なる人に會ひし事なり。こゝに偉大なる人といふは、財産の多き人にもあらず、爵位の高き人にもあらず。世には學藝に秀でたる專門家あり、されど多くは一方に偏したる人なり。才子といふべき人もあり、されどさる人に限りて學問などは淺薄なり。溫厚なる君子もあり、されど多くは社會の活事業に堪へず。歌を詠む人の字は拙く、謠曲をよくする人

一方に偏し

人格

に音樂の味を解せざるが多き習にて、種々の道にわたりて知識も趣味も兼ね備へ、且人格の世に抽んでたる者に至りては、その人甚だ少し。偉大なる人とはかくの如き人をいふなり。

圓滿

かくの如く圓滿なる人は、萬事自由なる社會に生長し、一定の型におし込められざる國民に多きものなり。專門の學に長じて、尙普通の知識に通じ、事務を委ぬれば、銀行の頭取ともなるべく、或は一州の長官ともなるべし。政治を談ずれば、その見識遙に二三流の新聞記者に超え、美術を評すれば、歐羅巴の畫家はい

二三流

いふも更なり

尾形光琳、喜多川歌麿、葛飾北齋、共に近代の有名なる畫家

ふも更なり、光琳、歌麿、北齋などの鑑定も相應に能くすべく、音樂の趣味にも乏しからず。品行方正、よく己を持し、漫りに人の短所を咎めず。子供には子供の如く、書生には書生らしく交はり、軍人に對すれば軍事を談じ、商人と語れば商業を論じ、農業家に會へば作物の事を說く。かくの如く、概していへば常識の大いに發達したる人は、英米兩國に最も多く見らるべし。』

短所

常識

これらの人に交はりたるは、余が留學中の最大の賜なりき。一度その面を見れば、終生その名を忘れず、或は病床に臥し、或は失望の淵に臨める時、その音容を

臨、望

望、臨
起しつべし

追憶すれば、闇夜に燈光を望むが如く、再び勇氣を振り起しつべし。故に今日にても、外國に行かんとて、余に助言を求むる人ある毎に、余は必ず「良き紹介を求めて、偉大なる人に會へ。」といふを常とす。

（歸雁の蘆による）

二四　旅順口の閉塞

明治三十七年二月、わが征露軍の艦隊は、旅順口第三回攻撃を行ふに當りて、普通の法に由らず、港口閉塞の勇斷策を取れり。これ蓋し第一回、第二回のわが攻撃に、敵艦はいたく恐怖して、港内深く潛み居たるが

凡そ
われも〳〵と
林紋平
負はする事

故なるべし。

凡そ閉塞の任務は尋常の勇士が爲し得べきものにあらず、決死の大丈夫にして始めてこの大事を遂ぐべし。されば、まづ全艦隊に令して、決死の士を募集せしに、われも〳〵と應ずるもの殆ど三千人に上り、三笠乘組員林二等兵曹の如きは、血書してその赤誠を表したり。司令部にては、全軍の英氣既に敵を呑めるを嘉みし、その中より最も敏活に最も沈着なるもの七十七人を選拔して、この大任を負はする事とせり。その方法は、わが郵船會社及び商船會社等の老朽船

たる天津、武州、武陽、報國、仁川の五隻に石を積みて、敵地に侵入し、自ら之を破壞沈沒して港口を閉塞し、以て敵艦出入の自由を奪はんとするにあり。

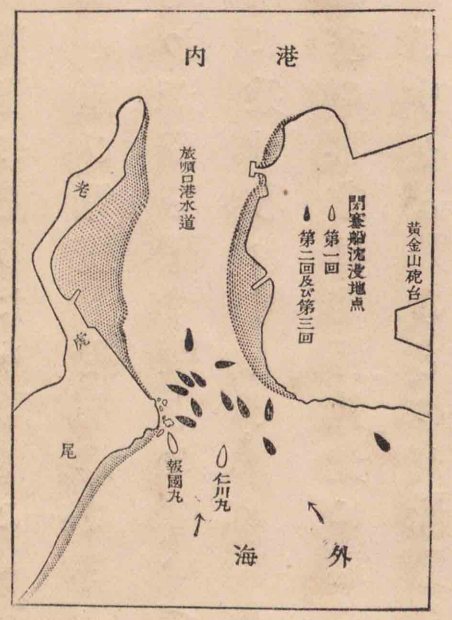
自由を奪はん

時は二十四日午前四時頃、有馬中佐、廣瀨少佐以下、決死の七十七士、それ〴〵の船に分乘し、老鐵山の南方より、天津丸を魁として港口に進航せり。名に負ふ黃金、老鐵諸山の砲壘等より、それと知りて擊ち出す彈丸は、百雷の落つるが如く、又それより放つ探照燈は、烱々(ケイケイ)としてわが船を照し、闇夜をして忽ち白晝に變ぜしむ。さばれ我は固より決死隊なり、いかでかためらふ事あるべき。たゞ一直線に進みゆきしが、如何せん、激浪、砲彈等に妨げられ、天津丸まづ淺瀨に乘り上げ、武州丸續いて舵機を折られ、武陽丸も未だ目的地に達せざるに、自ら破壞沈沒したり。この危急の際に、報國、仁川の二隻のみは寒風怒濤を切り、砲彈雨注の間をくゞりて猛進し、辛うじて港口に達し、今は時よしと、各、爆

有馬良橘
廣瀨武夫

名に負ふ

さばれ



こゝを先途と

せざりきと。

萬死を冒せる

梅原健三

發沈沒せしめたり。敵はこゝを先途と擊ち立て、硝煙海を蓋ひ、電燈も用を爲さざるまでになりしは、反つてわが姿を隱す便となり、いづれも萬歲を唱へて、端艇に乘り移れりとぞ。

閉塞の事業は砲彈、燈光に遮られて、思ふやうに成功せざりきと聞けど、わが沈勇なる將士の擧動は敵をして戰慄せしめしこと少からず。しかのみならず、萬死を冒せるわが艦艇に於て、殆ど損害、死傷なかりしは、天佑といふ外なし。たゞ惜しむべきは、仁川丸の閉塞隊員のうち、梅原二等機關兵が、その乘船を沈沒せ

米西戰役はアメリカ合衆國とイスパニヤとの戰役にして、西暦一八九五年の事

サンチヤゴはキューバ島の港

要すと。聞くを。

さらぬだに

しめて、端艇を卸さんとする際、敵彈の爲に戰死せし事なり。

そもく敵港閉塞の事は、海戰史上、甚だ稀なる擧にして、近く米西戰役の時、剛勇なるホブソン大尉がサンチヤゴにて試みたりし外に、未だ世に傳ふる所あらず。この大勇斷策は少くとも敵の二倍以上の兵力を要すと聞くを、今、旅順の要塞、砲彈雨注の下に於て、泰然としてこれを實行せるは、決死隊の大面目といふべし。さらぬだに二十七八年戰役以來、わが艦隊の名譽は世人の仰ぐ所となれるに、今より後、日本海軍

賞讃

の勇氣は、現代に於て、全世界の賞讃を得るのみならず、萬世の下まで赫々たる譽を貽すに至らん。

（池邊義象）

二五　閉塞隊の兵士

閉塞隊に入りたる者はいづれも必死の覺悟なることいふまでもなけれど、特に注意すべきは、その中の下士卒が平生沈着にして、禮儀を重んじ、かりそめにも軍紀を犯すなどの事なく、行狀一等なるものの多き事なり。肩を張り、肱を怒らし、酒を飲み、亂暴し、所謂豪傑風を氣取るものにして、閉塞隊に入りたるは、殆

軍紀　下士卒の行狀は四等に分つ

特別の任務あるものの外は總員舷側に整列するを登舷禮式といふ

ど一人も無し。

その將に艦隊に別れて出發せんとするに當りて、之を送る將士は登舷禮式を行ひ、帽を擧げ、手巾を振りて、萬歳を連呼せり。之に對して、行く者の擧動いかにと、某將軍は雙眼鏡を執りて熟視せるに、彼等は毫も喧騒の狀なく、將校は船橋に立ちてコンパスを見つめて、ひたすら航路の安全を保たんとし、下士卒は持場持場に就きて、平生よりも一層沈着に職務に從事したり。

就中最も感ずべきは、端艇受持の兵士にして、軍艦旗

遭遇すとも

整列

點檢

を丁寧に疊みて端艇の中に備へたり。その意蓋し如何なる場合に遭遇すとも、日本の軍人たることを標示し、その最期を潔くせんとの覺悟に外ならざるべし。

閉塞の難事を終へて還れる時も、毫もその功に誇ることなく、各自の本艦に歸るや、甲板に整列し、士官の點檢を受けし後、徐かに解散する樣は、遊山より歸れるが如く、今しも最も冒險なる事業を行へるものとは思はれず、涙催すばかりなりき。

（小笠原長生）

缺點を補はん

條件　適應

二六　下瀨火藥

余がこの火藥の發明を思ひ立ちしは、明治二十年、印刷局より轉じて、赤羽なる兵器製造所に海軍技手として通勤せる時なりき。日々種々の兵器を取扱へる中に、從來わが國に用ふる砲彈の破裂が十分ならざるは、裝塡せる火藥の力の薄弱なるに因るを知り、一層猛烈なる火藥を製出して、この缺點を補はんと志し、それより專らこの研究に從事せり。

元來軍用火藥には種々の條件ありて、之に適應せる

ものの外は、實用に供すること能はざれば、實地に試驗して之を確めんが爲には、非常に心身を勞して、約六年の歲月を費したり。その結果は甚だ良好にして、今日にては豫期以上に達せり。さてそのながゝの研究の中、これらの事業に生じ易き災難は幸にして少かりしが、尙その間に二回の事件を生じたり。

用を辨ぜず

その一は、火藥の點火に用ふる所謂發藥を試驗せる時、その爆發の爲に余が負傷したることにして、爾來余の左手は用を辨ぜず。これ世に戒むべき不注意に因るものにして、この災難このかた、益その恐るべきを覺れり。世にはこの不注意の爲に種々の損害を蒙るもの少からざるべきが、余が一肢を失へるは、終生忘れんとして忘るゝ能はざるその記念なり。

忘るゝ能はざる

次に、明治二十六年、相州にて試驗せる時、轟然一聲、徑二尺五寸、長さ三間餘の大砲は微塵に破壞して、斷片、土沙四方に散亂し、特に百三十貫餘の鐵片が、二町餘の此方なる余等の頭上を掠めて落下せるは、今より追懷してだに慄然たらざるを得ず。かく危險にも遭ひ、又苦辛をも重ねしが、幸に——この火藥の爲には——三十七八年の戰役ありて、十分にその威力を示

頭上を掠めて追懷。

規模

同窓

し得たるは、余が滿足に堪へざる所なり。

今日こそ國勢の進歩に伴なひ、技術家の需要も增し、又之を遇する法も備りたれ、二十年前のわが工業界は猶幼稚にして、その規模も亦今日の如くならざりき。余は十七年に大學を卒業したれども、就職の途なく、辛うじて印刷局に雇はれて、印肉製造に從事し、後海軍省に轉じ、始めて判任官三等技手となりて、熱心に火藥の研究に從事し、同

下瀨雅允氏

勸告

外ならず

破壞。

特色

裝置

窓の懇なる勸告はありしが、年來の志を擲つに忍びずして、遂に六年の歲月を判任官の地位に過せり。思ふに今日の結果を得たるは、この耐忍と勉强との賜に外ならず。

抑、火藥には破壞用と發射用との二種ありて、わが下瀨火藥は卽ち前者に屬す。下瀨火藥の特色は實に破壞力の猛烈と使用上の安全とにあり。こゝに同じ鐵板の上に同じ量のダイナマイト、綿火藥、普通黑色火藥、竝に下瀨火藥を裝置して、點火したるに、黑色火藥にては何の異狀も起らず、ダイナマイト、綿火藥にて

は板面著しく窪みたるが、下瀨火藥に至りては、鐵板を貫きて、その破片は地下三尺に達せり。

加ふとも　點火すとも

又下瀨火藥は之に鐵槌を加ふとも、點火すとも、甚だしきは榴彈を擊ち込むとも、決して爆發せず、唯松脂の燃ゆるが如くにして、一掬の水も容易に之を消しとむるを得べし。されば聊か危險はなけれども、一たびとむるを或裝置を施す時は、非常なる威力を現ずるに至る。綿火藥も殆ど之に類すれども、常に二割半の水分を要し、濕潤に過ぐれば點火の困難あり、乾燥すれば爆發の危險あり。然るに、下瀨火藥はたとひ水に浸すとも、決して發火に妨なく、よしや日光に曝すとも、少しも危險ならず、又數年を經とも、變質の虞なく、最も安全にして、極めて猛烈なる威力を有するなり。

よしや　ふ(經)とも

（青年之友所載下瀨雅允氏の話による）

二七　電氣

物質的　知る　知りし

一國又は一市の物質的文明の程度は、電氣應用の多少によりて推し測るべし。猶昔の人が、刀を見て武士の心がけを知ると、いへるが如し。

琥珀を摩擦すれば、紙片などの輕きものを吸ふ。この事實を知りしが、即ち電氣の力を知りし始なり。上古

知られ
知らず

ギリシヤの盛んなりし時、既にこの事實は知られ居りしが、その頃の人は何の爲とは知らず、之を琥珀の特性とのみ思ひたりき。十六世紀の末に至りて、英國のギルバートは、この鑛物に限らず、その他の物も摩擦すれば、同じ現象をあらはすべしと說きたり。されどかく說きたるに止りて、之を如何に應用すべきかは、未だ何人も思ひつかざりしなり。

十八世紀にガルバニーといふイタリヤの醫師ありき。ある時、學問の用にとて、蛙を殺し、銅線に刺して吊り下げ置きたり。折節風そよぎ、蛙の屍はゆられて、鐵

さはるや否や
よらずしても。
端を發ける
準備

の勾欄にさはり、さはるや否や、脚をはねて踊れり。不思議なる事かなとて、ガルバニーはその原因を調べ、これも亦電氣の作用に出でたることを知れり。これ電氣が摩擦によらずしても起ることを知りたる始にして、後世の種々の發明は實にこゝに端を發けるなり。

アメリカの有名なるフランクリンは、雷の轟き、電光の閃くも、亦雲間の電氣の作用に外ならざるべしと推測し、雷鳴の折、準備を整へて、紙鳶を揚げ、遙なる空の力を座右に引きて、その推測の慥なることを證明

閑事業

革命

せり。この企を見て、ある人笑うて曰く、「かくの如き事を知り得て、何の役にかたつ」と。フランクリン答へて曰く、「しからば小兒は何の役にたつか、唯見よ、かれらは發達す」と。果してこの發見は無益の閑事業に止らず、やがて避雷針の發明となりて、裨益を世に與へたり。

ファラデイは近世の英國の大學者にして、電氣の學に革命を起せりといはるゝ人なり。當時新に發電機を造れる者あり。その成功を祝して饗宴を開き、席上にて述べて曰く、「機械の設備はファラデイ氏の學說を應

主賓

ざりきといふ

究めくて

用して成れり。わが成功はひとへに氏の賜なり」と。ファラデイ主賓として座にあり、叫んで「わがまうけし小兒は今大人となれり」とて、悅に堪へざりきといふ。

江海も細流に始る、琥珀や蛙についての小き疑は、究め究めて驚天動地の事業を成すに至れり。無益の些事に日を費すとて學者を誹るは、他日の結果を思はざるものの言なり。それらの人は今日の電氣應用の狀態を見よ。電鈴あり、電扇あり、鍍金に、製版に、治療に皆その用あり。電燈は眞晝の如く輝き、電車は市街を縱橫に走る。電信は千里の山海をも一瞬に通じ、電話

繁劇
造化
大發展
記憶（臆病）

は繁劇なる事務を坐ながらに辨ず。更に無線電信は實地に用ひられ、無線電話も亦發明せられたり。造化の工を奪ひて之を手中に役することゝ、まことに驚くべし。しかも人智は日に〳〵進んで止まず、電氣事業が將來いかほど發達すべきかは豫測し難しと云ふ。

二八　マルコニー

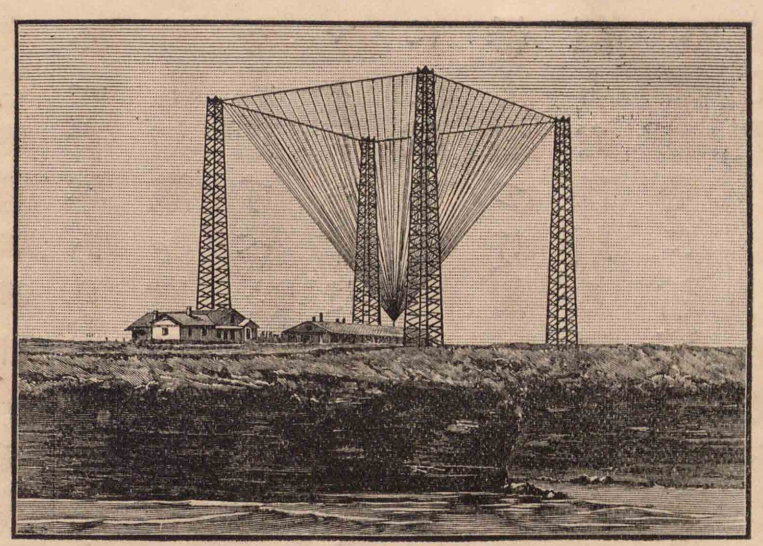
回顧すれば、明治廿七八年はわが國運大發展の時期にして、國民の活動は世界の人類の進歩に資すること大いなりき。歴史上かゝる記憶すべき時期に際し、

成績（舊蹟）
結果

海洋萬里を隔てたる伊太利國に、マルコニーといへる一青年あり、年僅に二十ばかり。曾て大學に學びたりし知識を應用し、途中一も電線を張らずして、通信を傳達すべき方法を試み居たり。

マルコニーはボロニヤ市の郊外なるその父の別莊にて試驗を行ひたり。竿頭にブリキ箱を吊りて、容電器と名づけ、用ふる機械も小兒の玩具に類し、その成績もなほ頗る不滿足なりき。されど將來の發達に就いては心に信ずる所あり、遙に書を英國の遞信省に於て重要の地位を占むる電氣學者サー＝ウィリアム＝プ

概要



英領カナダ東岸にあるマルコニー氏の無線電信所

リースに贈つて、その成績を報じたり。その概要に曰く、「この容電器を二米の竿頭に吊る時は、通信距離三十米に達し、四米の時は百米に達し、八米の時は一哩半の通信距離を得」と。

マルコニーは遂にわが明治廿九年の七月倫敦

に來れり。その携帶せる機械は怪しげなるブリキ箱にして、當時、無線電信などいへる名稱は、なほ普く世に知られざれば、この箱について說明すれども、了解せらるべくもあらず。まして之を携帶せるは少壯の伊太利人なれば、稅關吏は復も無政府黨員の上陸かと怪しみ、その機械を破裂彈又は他の重大なる犯罪具と認めて、之を破壞したり。

べくもあらず

復も

程なくマルコニーは紹介を得て、サー＝ウィリアムに面會し、つぶさに發明の原理、機械の性質、既得の成績を陳述せり。サー＝ウィリアムは學名世に高く、既に一種の

無線電信機を發明したる人にして、その機械は數年間英國遞信省の用に供せられ居たり。されど今この陳述を聞くに及びて、その發明の一層良好にして、將來の發達の極めて有望なるを知り、己を空しうして、直に十分の助力を與へんことを約す。乃ち遞信省の機械を自由に使用せしめ、己の實驗室を研究の用に供せしめ、又知名の學者に紹介して、その補助を受けしめぬ。かくして愈〻試驗の結果を見て後、皇立學術協會に於て、始めてマルコニー式無線電信を世に紹介せしに、聽衆場内に溢るゝばかりなりきと云ふ。尋で

己を空しうし

知名の、有名なる

なりきと云ふ

再び英國學術協會の年會に於て、マルコニーが研究の成績を報告して、來會の學者に大いなる感動を與へたり。

マルコニーの知己はサー＝ウィリアムなり、一个の青年は、外國に於て、學力、人格、地位、名望共に高き大家の補助によりて、始めてその傑出せる才學を世界に公示するを得たり。抑〻彼が研究の事項は、世人が幾代も不言の裡に渇望し、されどその計畫の餘りに大膽なるが爲に、何人も眼前に之を見んとは想はざりしものなり。既にマルコニーが鄕國に於て多少の成績を示

事項。（項、頃。）

計畫

有名なる、知名の

したる時も、又倫敦に來りて後も、當時の有名なる學者の中には、その成功を疑ふもの少からざりき。かゝる間にマルコニーの事業は着々として進み、空想は遂に事實となり、數年ならずして世界一般にその恩澤に浴するに至れり。

恩澤に浴する

（世界の無線電信による）

二九　洋學の由來

享保元年は二三七六年、德川吉宗の時

洋學の由來を尋ぬるに、昔享保の頃、長崎の譯官某等和蘭貿易の便を計り、その國の書を讀み習はんことを請ひて、その許可を得たり。これ卽ちわが邦の人が、

寶曆元年は享保元年をさること三十五年

切磋

與、與

草創の業

横行の文字を學べる始なり。その後寶曆、明和の頃、青木昆陽命を奉じてその學を唱へ、又前野蘭化、桂川甫周、杉田鶴齋等起りて和蘭の學に志し、相與に切磋して、各、得る所あり。されどなほこの學の始なれば、書籍甚だ乏しく、師友もなければ、遠く長崎の譯官に就きて、その疑を質し、偶、和蘭人に會へば、その教を請へり。かく不便なりしかど、この人々いづれも英邁の士にして、只管草創の業に身を委ね、日夜研精して、寢食を忘るゝに至れり。或は傳ふ、蘭化長崎に往きて、和蘭語七百餘言を學び得たりと。これに由りて古人が力を

切なりし。と修學の難かりし。とを

天保元年は二四九〇年、德川家齊の時

翻譯

用ふるの切なりしと修學の難かりしとを察すべし。」

その後大槻玄澤、宇田川槐園等繼いで起り、降りて天保、弘化の際に至り、宇田川榛齋父子、坪井信道、箕作阮甫、杉田成卿兄弟、及び緒方洪庵等輩出せり。この時は讀書、譯文の法漸く開け、諸家翻譯の書續いて世に出でたれども、概ね和蘭の醫籍に止り、旁ら窮理、天文、地理、化學等

前野蘭化

蘭學

士君子

通ずるの要務たるを

興、興。

の數科に及べるのみ。故に當時この學を稱して蘭學と云へり。蓋しこの時といへども、通商の事は支那の外は和蘭一國に限り、來舶の地も只西陲の長崎のみなれば、尙書籍の乏しかりしは論なく、すべて修學の道甚だ便ならざりき。

然るに嘉永の末、アメリカ人が渡來せし後、これと和親貿易の約を結び、又好を英、佛、露等の諸國に通ぜしより、わが邦の形勢終に一變し、世の士君子皆かの國の事情に通ずるの要務たるを知れり。因りて百般の學科一時に興り、先達の士各その學を唱へ、生徒を教

へ、こゝに至りて始めて洋學の名起れり。これ豈學術の一大進歩ならずや。

顧ふに一事の將に開けんとするや、進むに必ず漸を以てす、譬へば樓閣に登るに階級あるが如し。卽ち天保、弘化の際、蘭學の行はれしは、寶曆、明和の諸士その初階をなし、方今洋學の盛なるは、各國の通好に因れりと雖も、實に天保、弘化の諸家その次階をなせるなり。

ならずや

するや

方今

（慶應義塾五十年史）

新體國語教本　卷四終

明治四十一年九月廿八日印刷
明治四十一年十月二日發行
明治四十一年十二月十日訂正再版印刷
明治四十一年十二月十五日訂正再版發行

新體國語教本
毎卷賣價金貳拾五錢

著作者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　藤岡作太郎
發行者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　西野虎吉
印刷者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　野村宗十郎
發行所　東京市日本橋區數寄屋町九番地　【振替貯金口座】東京第五參貳貳番　開成館
販賣所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　林平次郎
販賣所　三木佐助

著作權所有
檢印　著者
不許漢譯

（株式會社東京築地活版製造所印刷）

180

新刊

國語教科叢書

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

文學博士 藤岡作太郎著 新體國語教本	全十冊	各冊金貳拾五錢
文學博士 金澤庄三郎著 日本文法教本	全四冊	各冊金貳拾錢
文學博士 新村出編 日本文法教本別記	全一冊	定價金貳拾錢
文學博士 新村出編 普通教育國語綴字法	全一冊	定價金貳拾錢
文學博士 大槻文彥著 普通教育日本文典	全三冊	各冊金貳拾五錢
文學博士 藤岡作太郎著 新體日本文法教科書	全四冊	首卷金貳拾錢 上下續卷各冊金貳拾五錢
開成館編 日高秩父書 新體日本文學史教科書	全一冊	定價金四拾五錢
明治習字帖	全三冊	各冊金拾八錢